

## バルザックの『人間喜劇』における 『十三人組物語』の意義

中 村 加 津

『十三人組物語』<sup>(1)</sup>が創作され発表されたのは、1833年から1835年にかけてである。この時期は『人間喜劇』の創作にとって重要な時期であったと考えられる。後に『人間喜劇』の総題の下に集められた約100の小説のうち、半分近い作品は1829年から1835年迄に創作されているし、いわゆる「人物再現法」が着想されたのもこの頃であるとされている<sup>(2)</sup>。バルザックが仮名を使っていた試作時代から『人間喜劇』の世界の創造者へと脱皮出来た時期であると言える。その脱皮の過程を『十三人組物語』の中に探りたい。この作品をとり上げた理由を先ず明らかにする。

『十三人組物語』の序文において、バルザックは十三人組という秘密結社について説明しているが、ここで作者自身がこれら十三人の男性を、イギリスの怪奇小説作家ラドクリフ夫人の作中人物と比肩するものと見做していることから見て、この作品には初期無名時代の作品と同じく暗黒小説的要素が多分にあると考えられる。しかし一方では、次の二つの理由からこの『十三人組物語』においてバルザックは『人間喜劇』の世界へと大きい一歩を踏み出していると考えられる。第一に、「人物再現法」を使って、この三つの全く別別の物語に有機的な繋りを持たせることにより、『人間喜劇』の世界を小規模に予告しているかのような形式を作っていることである。第二に、この三つの作品のいずれにも話の筋からのいわば脱線の形で著者のパリ論が展開されている。『人間喜劇』の重要な舞台はパリであるので、このパリ論はこれらの作品のためだけではなく、『人間喜劇』全体に関係するものである。

次に本稿の作品分析の方法について述べる。

作家を極く大ざっぱに分けて、作中人物に己れを託し、自分自身を描くために作品を書くタイプと、たとえ自身をモデルにしたような人物を描きながらも、自分自身は姿を隠し、作品をつき離して外にあるものとして描くタイプとがある。バルザックが自分自身について語る作家でないことは、多くの研究者や伝記作者に指摘されてきた。『知られざる傑作』の中で老画家フレンホーフエルは、キャンバスの上に現実に生きているのと同じ女性を描き出そうとして何年もの月日を費やし、ついに神ならざる己れの無力を悟って自殺するが、ここにバルザックの創作態度が象徴的に表われている。スタンダールの『パルムの僧院』

を高く評価したバルザックは、『ベール氏研究』を書くが、この小説に深く感動しながらも作品の構成の面で不満を述べ、自分流に『パルムの僧院』を構成しなおして見せる。作品世界に対する二人の作家の態度の違いがここに見られる。フレンホーフエルは「芸術の使命は自然をコピーすることではなく、自然を表現することだ」<sup>(3)</sup>と言うが、これはバルザック自身の考えであって、彼はスタンダールに「自然において真なる主題をそのまま採った」<sup>(4)</sup>こと、「事件を起こったまゝに並べて描いた」<sup>(4)</sup>ことが『パルムの僧院』の誤りであると指摘する。このように自分の生み出す作品世界の中にどのような手順で読者を導き入れるかに重大な関心を払ったバルザックの作品を分析する場合、作者のその手順を追って行くこと、即ち作者が読者にどのような道筋を通して物語の真実に近づかせているかを見ることは、バルザックが何を描こうとしたのかを知るための有効な手段であると思われる。このような理由から、以下に、この三つの作品において可能な限り、読者の置かれる立場を作中人物の置かれている立場との関連において探り、その結果何が明らかになるかを考察したい。

第一の物語『フェラギュス』に最初に描写されるのは、モランクールという、うぶで小心な青年貴族の、人妻に対するプラトニックな恋である。純粹に相手を讚美するだけの片思いに彼は甘んじているが、それは相手の女性とその夫とがたぐい稀な仲の良い夫婦であることが社交界で有名だからである。ところが最初の場面では、この女性がいかにもおしのびの様子でこっそりと怪しげな家を訪問するのを偶然にもモランクールが目撃する。この訪問の目的が何であるのか。モランクールにも読者にもそれは人妻の浮気であるとしか考えようがない。「天使を失った代りに最も魅惑的な悪魔を見出した」<sup>(5)</sup>ように思ったモランクールは彼女の浮気の真相を究明すべく探偵のような行為をする。始めのうち読者にはモランクールの捜査が進む範囲においてしか真相に近づくことを許されない。しかしこの美しい人妻クレマンス・デマレの秘密の訪問の相手がフェラギュスという名を持つ人物であることが解った時から、読者はモランクールより優位に立つ。何故ならこの名はモランクールにとっては全く聞き覚えのないものであるが、読者は序文の中でこの人物が十三人組の首長であることを知らされているからである。この後、モランクールは何度も命を狙われるが、彼にとっては予想も出来ない一連の恐ろしい出来事が、読者にとっては十分に予想出来るありそうな事だということになる。読者はいかに巧妙にして残酷な手口が使われるのかを見ることに満足すら覚える。それだけに、クレマンスという女性はモランクールから見るより一層いかがわしい暗い背景を持つ女性だということになる。ところが作者はクレマンスへの讚美をやめない。始めにモランクールの目に写ったまゝに外面的にも内面的にも美しい女性として描かれる。読者はデマレ夫妻の寝室へと導かれる。この寝室という舞台装置とそこに居る二人の人物によってバルザックは自分の理想とする夫婦生活を描いていると思われる。恋愛感情が強まりこそすれ弱まることなく結婚生活の中で保たれている。読者はクレマンスの、夫に対する愛に疑いを挟むことが困難になる。一体この女

性についてどのように考えればよいのか。読者がこのような混乱に陥ってしまうのは、作者が読者の立場を、モランクールの側から突然、クレマンズの夫ジュール・デマレの側へと移すからである。クレマンズが何度もフェラギュスを訪問する理由の究明の仕事が、モランクールからジュールにバトンタッチされるのである。フェラギュスによって頭の皮膚から毒薬を浸み込まされたモランクールは、心身ともに麻痺してやがて死ぬが、理性が働く最後の時にジュールにクレマンズへの疑いをいわば引き継ぐ。従って読者は今度はジュールの立場から真相の究明にあたらなくてはならない。モランクールの片思いとは比較にならない深い夫の愛と、それだけに強い疑惑の苦しみに立ち合うために読者はデマレ家の寝室に導かれたのである。今度は読者はジュールと共に探偵のような行為をする。ジュールと共に、フェラギュスが実はクレマンズの父であったことを知って驚き、クレマンズの遺言状によってはじめて、何故彼女がこれ程大きい犠牲を払って夫を欺かなければならなかったのかを知るわけである。ジュールやモランクールには、最初からあますところなく照明が当てられ、読者に知らされない部分はない。クレマンズには、夫を愛する妻の部分からのみ照明が当てられている。十三人組との関係の部分は影になっていて、その影の中に十三人組の動きがはじめはぼんやりとしか見えない。少しずつ照明が当てられる部分が広がって行く。

明るみに出ているのは愛している人達である。彼らは影に隠れた人達により苦しめられている。影にある何か大きな力によってふりまわされている。被支配者である。しかしすべてが明るみに出た時、そこにも愛があることがわかる。フェラギュスの娘に対する愛である。そして今までこの世界を支配していた十三人組が、今度は弱者となる。クレマンズを神に奪われてそれまでの彼らの働きがすべて無益なものとなり、フェラギュスが廃人となって十三人組の組織が恐らくは崩壊するからである。この時の支配者である神は、勿論我々の前に姿を現わさない。葬儀のミサ曲の中に暗示されているだけである。

第二の物語『ランジェー公爵夫人』でも、読者は恋する者の側に立たされ、照明はその方向からのみ当てられていることに変わりはない。失踪した恋人を各地に探しまわったモンリヴォー将軍が、遂に地中海の島の、人を寄せつけぬ岩壁の上にそそり立つカルメル派の修道院で恋人を見つける場面からこの小説は始まる。ここで女性の存在は、先ずオルガン演奏で予告され、次に歌声となり、最後に狭い会見の部屋に実際にその姿を現わすが、読者は常に男性の側に立たされて格子の向うの女性の心理は推測することしか出来ない。その次に物語は五年前に遡り、パリの社交界の場面に移る。ここではランジェー公爵夫人とモンリヴォー将軍とは全く同等に扱われている。読者はこの二人の人物の全容を隈なく見せられる。このモンリヴォーが十三人組の一員であることは、時々作者が暗示しているが、少なくとも恋するモンリヴォーには十三人組らしい所はない。彼を十三人組と結びつけたこと自体、読者の感覚からすれば唐突とも言えるのであって、事実、彼は他の作品で十三人組の一員として働いているところは一度も描かれていない。フェリシアン・マ

ルソーは、モンリヴォーのような正直者が十三人組の一味であるとは意外であると述べている。<sup>(6)</sup> この作品の中でモンリヴォーが十三人組の仲間と共に姿を現わすのは、彼がランジェー公爵夫人の額に焼ごてをあてて人前には出られない顔にすることによる制裁を企て、それを半ば実行する場面と、最後の、修道院に侵入して彼女を略奪する場面とである。それまでは盲目的な恋人であり、ランジェー公爵夫人に翻弄されるまゝになっていたモンリヴォーが、十三人組の仲間の一人、ロンクロールから智慧を借りた途端、全てを見透す支配者となり、読者には彼の意図が隠されてしまう。恋する者、弱者はランジェー公爵夫人だけとなり彼女は目隠しされてどこかに運びこまれ、十三人組の意図に翻弄されるまゝになる。読者はランジェー公爵夫人の側にばかり立たされる。支配するのは十三人組のみである。モンリヴォーが次に何をするつもりなのか知ることが出来ない。ロンクロールが秘かに彼に智慧を授ける場面でも、肝心の所はわざとのように読者に隠される。「彼は一言アルマンの耳に囁いた」<sup>(7)</sup>と書いてあるだけである。

ところが最後の略奪の場面では、我々は十三人組と共に居る。修道院への侵入を前にした緊張をモンリヴォーと共に感じる。彼らの計画は十分に知ることが出来るが、修道院の厚い壁の中で何が起きているのかを知ることは出来ない。超人間的な智慧と勇気の限りを尽してこの難攻不落の修道院に突入し、そこで略奪の目的であるランジェー公爵夫人が既に神に召されていることを知るのである。又しても十三人組の働きは徒労に終わる。モンリヴォーは、はじめの決心にも拘らず神から恋人を奪い返すことに失敗したのである。

以上二つの作品に共通していることは、十三人組は、人間世界では全てのものを支配できる圧倒的な強さを持っており、彼等を負かせるのは神だけであるという点である。第三の物語『金色の眼の娘』ではどうであろうか。この小説が以上二つの作品とも、他の多くのバルザックの作品とも違っている点は、登場人物より読者の方が早く真相を知らされる事である。作者は読者の方に先に種明かしをし、読者は自分の知っている謎にいつ主人公が気がつくのか楽しみにしながら読み進んで行くという形がとられている。『フェラギュス』における、弱者であり、簡単に殺されてしまい、主要人物でもないモランクールよりもずっと低い立場が、この『金色の眼の娘』の主人公である、そして十三人組の中でも特に王者の風格を備えたアンリ・ド・マルセイに与えられている。まだ物語が始まる前に、マルセイには腹違いの妹があり、それがハバナで育てられてからヨーロッパに帰っており、今はパリのサン・ラザール街に住むサン・レアル侯爵というスペインの老富豪の妻となっていることが述べられる。又、彼女はハバナから「西インド諸島生まれの混血の若い女と、植民地の悪習」<sup>(9)</sup>とを持ち帰っている。

マルセイというドン・ファンが「肉体的に見て未だかつて会ったこともない見事な女だ」<sup>(10)</sup>と認める女がそのサン・レアル侯爵邸に住んでいることが判った時、読者はマルセイのように簡単にはそれが老貴族の情婦だとは思いつままない。妹の存在を知らされていな

いマルセイと、その妹のアウトラインを知らされている読者との違いがある。読者に、この金色の眼をした不思議な女がマルセイの妹の同性愛の相手ではないかと思わせる伏線が二つある。先ず、マルセイ自身がこの女のことを友達に話す時に《une femme, ou plutôt (…) une jeune personne》<sup>(1)</sup>と言って、この娘の、女としての存在にとまどいを見せている。又、その友達がマルセイに、自分はその娘がもっともっと美しい女性と一緒にいるのを見たことがあり、その女性がマルセイと似ていたと言う。<sup>(2)</sup>これらのことは読者にとってのみ意味を持つ事実で、何も知らないマルセイを少しでも真実に近づかせる役には立たない。この娘と時たま同行する老人の姿のみがマルセイの印象に残り、彼を誤った判断へと導く。読者はマルセイより少し上においてマルセイを観察する。しかしそれだからと言って読者に何もかもが見せられているわけではない。この金色の眼のパキタという娘が謎の存在であることに変わりない。読者はマルセイに近い位置に立たされて、パキタについては少しづつしか判って来ないのは『フェラギウス』の場合と同じである。

十三人組の一員であるマルセイがこの作品の中では自ら筋を推進させていく強い立場の人物ではなく、彼には隠された部分にいる何者かの力で動かされるまゝの立場を与えられている証拠は、以上の点ばかりに表れているのではない。マルセイとパキタとの恋そのものが常にパキタからの働きかけで進んでいる。マルセイがパキタに関心を持つようになったきっかけも、パキタの方から先に関心を寄せたからである。主導権をとるのは常にパキタの方で、マルセイは目隠しされて担架で運ばれるというような扱いまで受ける。十三人組の男達が常には他人にしているようなことを、ここでは他人にされる側になる。誰よりも愛されていると思っていたマルセイが、実は他の人物の代役を勤めさせられていただけなのだ気がつき、傷つけられた自尊心のための復讐にパキタの部屋にのり込んでみると、復讐は既に他の者の手で遂げられている。彼には出番もない。

『フェラギウス』においても、『ランジェー公爵夫人』においても、十三人組は少なくとも人間社会では最も強い力を持っている。神に娘や恋人を奪われても、遺体運び出すことには成功し、当時のパリでは困難な火葬にしたり、又海の底に沈めたりして人間社会での通常の葬り方には従わない。人間社会の法や掟には決して従わないことをあくまでも主張する。しかし、パキタの遺体はどのようになったのか我々には知らされない。マルセイにも恐らくは知らされないであろう。彼は自分を凌ぐ妹の残酷さ、情熱の激しさを前にして十三人組の仲間とともにさっさと退散してしまうからである。

このように、十三人組の支配力は作品を逐う毎に、順に小さいものになって来ている。それだけに神の審判は、フェラギウスに最も厳しく、モンリヴォー、マルセイの順に穏やかになって来る。フェラギウスの娘に対する愛は、ジュールの妻に対する愛を凌ぐものであった。娘の死により彼の生は無益なものとなる。廃人のようになるのは当然である。モンリヴォーのランジェー公爵夫人に対する愛も深いものではあったが、彼女を海に投げこむ時ロンクロールに「彼女のことは、子供の時に読んだ本みたいなものだと思いたま

え』<sup>(13)</sup>と言われたのに答え、「うん、結局一篇の詩に過ぎないんだね」<sup>(13)</sup>と悟りのよいところを見せる。何年か後、彼は上院議員になっている。<sup>(14)</sup>マルセイにとってパキタを失った打撃はもっと小さく、彼は誰の助けも借りずに諦める力を持っている。彼女のその後を知りたがる友人に、「胸をやられて死んだのさ」<sup>(15)</sup>とごまかして見せる。彼は後に、並びない権勢を誇る総理大臣になる。<sup>(16)</sup>

さて、ここで一つの疑問がわく。この三篇の物語をどうしてこのような順に配列したのであろうか。十三人組の物語であるならば、この男達の力が次第に大きくなるように、そしてこの反社会的な男達の傲慢を罰する神の審判も次第に厳しくなるように配列し、そして最後に首長フェラギウスと共に、この組織も崩壊してしまうように配列してもよかったのではないか。事実、この作品に扱われている事件は、配列とは逆の順に起こったものであることが、主人公の年齢等から推定出来る。モランクールは王政復古（1814年）の時18歳で、この事件が起こるのは彼が23歳になってからである。<sup>(17)</sup>即ち1819年以後である。モンリヴォーがスペイン領の孤島の修道院にランジェー公爵夫人を探し当てるのは、フランスがスペインに干渉して革命を挫折させ、フェルナンド七世の王権を回復した時のことであるが、それは1823年である。パリでの二人の恋はそれより五年前のことであるから1818年ということになる。「モンリヴォーは1818年のなかごろにパリに帰った」<sup>(18)</sup>という記述がある。その少し後に、ランジェー公爵夫人にはじめて会ったのである。マルセイがパキタに会ったのは、「1815年4月中ごろ」<sup>(19)</sup>である。事件が起ったまゝに従って『金色の眼の娘』を最初に、『フェラギウス』を最後に並べなかったのは、何故であらうか。

バルザックは『ランジェー公爵夫人』の初版にあと書きをつけているが、それには次のように述べている。「以上二つの物語の中で、十三人組の力は死と神という永遠に人間の意志に対して自然が置く障害物以外に妨害するものを持たなかつた。(……)『金色の眼の娘』という非常にパリの三番目の物語の中では、十三人組は、その力をうち砕かれ復讐ははぐらかされるといふ経験をし、結末には神でも死でもなく、恐ろしい情熱を見たのである。この情熱を前にしては、我々の文学も尻ごみしてしまうたぐいのものである。しかしながら文学は、何物をも恐れはしない」<sup>(20)</sup>

バルザックは『金色の眼の娘』の中では、十三人組のような支配力ではなく、これに替るもっと大きい力を描くことを主眼としていたことがこれから窺える。十三人組的なもの、即ち暗黒小説的なもの、初期バルザック的なものに替る別の要素に重点が置かれはじめたことを、この後書きは示していると考えられる。事実、筋の上でこの三つの作品の配列の順に従って十三人組の支配力が弱くなって来ているだけでなく、作品の中に十三人組が現われる場面が順に少なくなって来ている。ここで我々は、十三人組に替ってバルザックの作品世界の中で徐々に大きく扱われてきているものについて、更に考察を加えなければならない。

バルザックは多くの作品において、「完全には混じり合わない二つの筋」<sup>(21)</sup>を並行して進

めるという技法を使っている。『十三人組物語』では暗黒小説的な十三人組のモチーフと、恋愛小説のモチーフがこれに使われている。恋愛のモチーフは、三つの作品を逐う毎にどのように変化しているかを考えてみよう。ここで、フェルヌ版刊行の際につけ加えられた献辞に注目したい。『フェラギュス』はベルリオーズに、『ランジェー公爵夫人』はリストに、そして『金色の眼の娘』はドラクロワに献げられている。ベルリオーズに献げられたのは、クレマンズの葬儀の場面のミサ曲の描写が、ベルリオーズの『死者のためのミサ曲』を思わせる部分が多いことからうなずける。<sup>(22)</sup> 又最初にモンリヴォーが修道院に恋人がいることを感じるのは、彼女の「テ・デウム」の即興的な演奏のためである。この音楽の描写は大いにリストに負っている。<sup>(23)</sup> マルセイとパキタの逢引きの場面は、ドラクロワの絵画を思わせる描写が多い。<sup>(24)</sup> それぞれの作品における恋愛のモチーフの特徴は、これらの場面に象徴的に表われている。先ず、クレマンズはジュールへの遺言状の中に、「私は愛が永遠に曇ることのない神の御許に参ります。あなたも後からおいでなさい。神の玉座の下で永久に結ばれて、私達はいつまでも愛し合えるでしょう」<sup>(25)</sup> と書く。サン・ロック教会で執り行なわれた彼女の葬儀は人目をひく豪華なものであったが、好奇心につられて偶然に集って来たゆかりもない人々さえ、そのミサ曲に心の底から揺り動かされるような演奏であった。ランジェー公爵夫人は修道女になってはいるが、クレマンズのように敬虔であるとは思えない。彼女のテ・デウムの即興演奏にはまだまだ現世的な感情が現われ、だからこそモンリヴォーは彼女の存在を感じる事が出来たのである。この演奏を聞いた時の彼の感動は宗教的なものではない。恋人を発見出来た喜びであり、彼は恋人を神の手から奪う決心を固めるばかりである。ジュールとクレマンズとの愛とは違って、この二人の恋人が天国で結ばれそうなことを暗示するものは何もない。全く地上的な愛である。『金色の眼の娘』の中でバルザックは、地獄になぞらえられたバリ論を展開している。マルセイのパキタへの恋は極めて官能的なものである。「快樂こそ人生の一番立派な解決だ」<sup>(26)</sup> と彼は言う。この二人の恋の中で、神は一度も名をあげられることはない。以上のように、この三つの恋愛小説は天上的なものから次第に地獄的な恋を描いている。これらの作品の配列は実は、制作されたまゝの配列がフェルヌ版にまで残されているのだが、これは『人間喜劇』の世界の発展の方向を示唆していると考えざるを得ない。この作品と同じ頃に執筆されていた『ゴリオ爺さん』では、フェラギュスの娘への愛と、万能の力が、二人の別々の人物に分離されている。ゴリオとヴォートランである。ヴォートランは後に、十三人組の男達と同じように、あれ程も反抗した社会と仲直りし、よき市民として社会のために働いている。<sup>(27)</sup> 社会に吸収されてしまうと云える。反対に父性愛の方は、ゴリオにおいて社会に同化することの出来ない強烈な情熱となって発展する。クレマンズが遺言状の中に描いているような平凡な父性愛ではなく、それはグロテスクなまでに盲目的なものである。救いのない破滅的な情熱であるという点で、『金色の眼の娘』に描かれる地獄的な同性愛と同質のものであると云える。『人間喜劇』は今後この方面に発展して行くことを、この『十三人組

物語』の三つの作品の配列が暗示している。初期バルザックから円熟期のバルザックへの橋渡しの過程を、以上のようにこの作品の中に読み取ることが出来るわけである。

## 注

Texte: Balzac, *La Comédie humaine*, V, Pléiade 1977.

- (1) *Histoire des Treize*, I. *Ferragus*, II. *La Duchesse de Langeais*, III. *La Fille aux yeux d'or*.
- (2) 安土正夫『バルザック研究』, 創元社, 昭35 p. 334
- (3) *La Comédie humaine*, X, Pléiade 1979, p. 418
- (4) *Oeuvres complètes de Honoré de Balzac*, XL, Louis Conard, 1940, p. 401
- (5) texte, p. 812
- (6) Félicien Marceau, *Les personnages de la Comédie humaine*, Gallimard 1977. p. 57
- (7) texte, p. 983
- (8) *ibid.*, p. 914
- (9) *ibid.*, p. 1058
- (10) *ibid.*, p. 1064
- (11) *ibid.*, p. 1063
- (12) *ibid.*, p. 1064
- (13) *ibid.*, p. 1037
- (14) *Le Contrat de mariage* 参照。
- (15) texte, p. 1109
- (16) *Le Député d'Arcis* 及び *Une Ténébreuse affaire*. 参照。
- (17) texte, p. 800
- (18) *ibid.*, p. 943
- (19) *ibid.*, p. 1058
- (20) *ibid.*, p. 1038
- (21) Honoré de Balzac, *Gambara*, José Corti, 1964, p. 23
- (22) texte, p. 1419
- (23) *ibid.*, p. 1474
- (24) *ibid.*, p. 784
- (25) *ibid.*, p. 886

(26) *ibid.*, p. 1102

(27) *La Dernière incarnation de Vautrin.* 参照。

(旧姓入江 F 33 関西外国語大学講師)